

第5回琵琶湖オオクチバス等防除モデル事業調査 検討会 議事要旨

日時：平成20年3月5日(水) 13:30~16:30

場所：滋賀県農業教育情報センター 1F 生活企画相談室

出席者：細谷委員(座長)、久保委員、高橋委員、中井委員、西野委員、松岡委員
滋賀県琵琶湖再生課(梶本主事)、滋賀県農政水産部水産課(大山主任技師)
滋賀県水産試験場(澤田参事、上垣主任技師)

事務局：環境省、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構

議事内容：

■座長あいさつ

- ・ この検討会も5回目である。次年度マニュアルを作るということで論議をつめたい。防除とは外来魚の害を証明するより難しいといわれている。しかし、琵琶湖に在来魚が戻ってきているという情報もあり、これらは回復の証ともみられる。これらのメカニズムや因果関係をどうやってマニュアル化していくかが問題である。

■平成19年度調査結果報告(資料-2:冬季調査結果)について

- ・ 防除体制での事例収集について、事業やイベントごとの実績(駆除量、参加人数等)を追加すること。

■平成19年度調査結果報告(資料-3:第4回検討会後の追加検討結果)について

- ・ 事務局より5月に見られた人工産卵床の掘り起こし跡について、温度から見てオオクチバスの可能性があるとの説明があった。しかし、少し水温が上がればブルーギルでもありうるので断定はできない。
- ・ 人工産卵床の掘り起こし跡について、伊豆沼では1匹の雄が3-5個の産卵床をつくり、そのうち1-2個で産卵が行われる。野田沼のオオクチバスの体長を見ると20cm程度とかなり小さく、成熟している雌が少なかったのではないか。
- ・ 平井(1970)の調査結果と野田沼の魚類相を比較しているが、シロヒレタビラは野田沼で確認されているのか。
- ・ 誤認の可能性があるので、再検討させて頂く。
- ・ 平井(1970)の調査結果について、これのみを根拠に目標設定をするのは無理がある。このため、野田沼等での標本調査により明らかになっている種があるので、これらを並列すればどうか。また、各魚種の構成比率も重要である。
- ・ 復元目標とする種ごとの生活パターンを考える必要がある。本来の再生、復元のソースがどこにあるのか確認する必要がある。
- ・ アユについて、駆除の効果がみられないとしているが、本来、評価対象から外すべきではないか。
- ・ 各魚種について駆除の効果を検討しているが、このメカニズムの検討という言葉は適切ではない。「望ましい方向」もしくは「望ましい駆除方法」の検討とすべきであろう。また、駆除効果が見られた種と断定するのは時期尚早である。
- ・ CPUEの比較について、ブルーギルの仔魚が多量に確認された時にサーフネットによる駆除を実施していることから、サデ網のCPUEはその時期に限定して比較したほうがよ

い。

- ・ 濁り等のコンディションにより、ブルーギル仔魚の発見率が異なるのであれば、マニュアルの記載事項になるので、次年度は透視度等の測定を実施すること。

■平成 20 年度事業内容(資料-3)について

(マニュアル目次案について)

- ・ 琵琶湖のマニュアル目次案のうち、合意形成は誰と誰の合意形成か。
- ・ モデル事業を進めるうえでの合意形成であり、本検討会がそれに該当すると考えている。
- ・ 駆除後の処分・利用については、重要な問題であるにもかかわらずマニュアル等で見落とされがちである。具体的数字を記載していくべきである。
- ・ マニュアルには、駆除のコストおよび評価の視点を入れるべきである。
- ・ 野田沼で実施したモデル事業は、単体ではマニュアルではなく他所で活用するための事例報告という位置付けではないか。重要なのは、この事例の中で水平展開可能な知見を切り分ける視点と意識が必要である。
- ・ 野田沼の事例を他の内湖に適用できるものもあればできないものもある。情報提供できるものとしては、各内湖の本来の生物相のリストを提示すること等がある。
- ・ マニュアル目次案について、これは全体の中での一部としての項目である。全国的な事例に対しても使える技術はあるだろう。琵琶湖から全国へ提言する機会もあると考える。

(次年度駆除・防除計画(案)について)

- ・ 人工産卵床に関する記述について、「オオクチバスの生息密度が低く野田沼では繁殖阻止の必要がない」と字句修正すること。
- ・ 次年度、駆除効果を確認するために、野田沼とその対照地点として乙女が池で、12月に潜水調査をやってはどうか。

■その他

- ・ 来年度はマニュアルを作成することからこの検討会を 3 回は実施したい。次回は調査結果が概ねまとまる秋ごろに実施したい。

以上

(文責：近畿地方環境事務所)